

ププブランド召喚

二代目神野礼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

召喚されたのは、なんとププブランド!?

果たして、ププブランドは生き残ることができるのだろうか……

「……聞くだけヤボってモンだと思っヨオ？」

目次

- 1 第一話 呆れ返るほど平和な国（戦いが無いとは言っていない）

第一話 呆れ返るほど平和な国（戦いが無いとは言っていない）

宇宙の彼方、その端っこ。

そこには遙かなる楽園がある。

誇張無しに星形の星、ポップスター。

ここは呆れ返るほど平和な国、ププランド。

デデデ山頂上　　デデデ城

「むっ、そう来たか……、おお、ありがとうな。」

部下とチェスに興じ、淹れられた紅茶を飲むのはププランドの

『自称』大王、デデデ。

ワドルデイの打った中々巧い手に頭を捻らせている。

オレンジオーシャン　メタナイト本拠地付近の山の山頂

「今日もまた、この国は平和か……」

満足気ながらもその声音にはどこか不満気なものが混じっているこの声の主は、メタナイトの最高司令官にして正体不明の騎士、メタナイト。

そこへ通信機からメタナイトの一人、メイスナイトの声が聞こえてきた。

『メタナイト様、ハルバードの修理がやっとこさ完了したダス！』

「うむ、次は試験飛行だな。すぐに戻る。準備しておけ。」

『了解ダス！』

ププランドのどこにでもありそうな平原　その川辺

「ポヨ……ポヨ……ZZZ」

釣竿を垂らしたまま夢を見ているこの丸ピンク。

彼こそカービィ。『星のカービィ』である。

時刻は太陽が真上にきたところ。つまり正午である。
カービィは、グ〜と鳴った自身の腹の音で目が覚めた。
お昼として持ってきたリンゴを頬張ろうとした時、

突如として光に包まれた。

「ポヨ!?!」

驚いたカービィは川にリンゴを落としてしまう。

「何事だ!?!」

「あわわわ、急に光ったみたいですよ!」

「何? とりあえず何が起こったか調べろ! カブーラーを動かしても構わん!」

未だチェスの決着がつかないため、気が利くワドルデイが持ってきたサンドイッチを啜えながら指示を飛ばすデデデ大王と、それに従うのはデデデ軍団一の部下、バンダナワドルデイ。

「何が起こった!?!」

「!メ、メタナイト様! き、急に光に包まれたダス!」

「それは分かっている。何か問題は起こったか?」

「いえ、今のところは。」

「そうか。……………バル艦長!」

「はっ、いかがでしたでしょうか?」

「付近の偵察だ。ハルバードを動かすぞ!」

「了解(ダス)ー!」

「ふむ……………ナッツヌーン、レインボーリゾート、フロラルドでもこの現象は観測した、か……………」

「大王様、どうします?」

バンダナワドルデイが少し不安げに尋ねる。

「……メタナイトだ、やつに通信を繋げ。」

「……おい、おかしいぞ!明らかにポップスターの水平線じゃない!」

ハルバード艦長、バルが驚きの声を上げる。

「どういうことなんです?」

「……おそらくは、転移か?」

「しかし、何故……」

「メタナイト様!デデデ大王から通信ダス!」

「……なるほど、となると。」

『ああ、多分ポップスター全土が転移したってことになる。……しかし、いったいなんでこんなことになったんだ?』

「それは私にも分からん。とりあえずそちらに……」

「メタナイト様!レーダーに感あり!飛行物体、そこそこ速いダス!」

「何?」

『……もしかするとこの星の奴らが気づいたのかもな。』

「あり得るな。さて、どうするか……」

日本国 海上自衛隊 P-3C

「おい、これ……」

「なんだこりや!?!こんなにバカデカいもんがあるってのか?」

「しかし、1kmもありそうな飛行物体ってなんなんだ……?」